

子供組にみられる教育観——宮城県下の事例を中心に——
 仙台白百合短大 田中弘子

目的 明治初期の近代学校教育制度の導入以来、いわゆる「囲い込み」によって子供達の生活と遊びにおける集団性が徐々に失われてきた。近年では、個々の子供にとって細かく分断される時間・空間と、ハイテク・消費文化によって、子供の孤立化や親子密着、あるいは社会性の欠落等がいわれる。このような事から、儼かながら近代以前の慣習が比較的残っている農漁村における子供組について、それを成立させている要因、その構造と村人や子供同士の関係性、及びその影響を考察して、現代的課題を解くきっかけとしたい。

方法 1987年5月より1990年1月までの期間、宮城県角田市金津における子供組による金津七夕(7.8月)、及び同県柞木郡鳴瀬町宮戸同夜における子供組の赤籠りとえんずのわり行事(12.1月)に関する現地調査を行った。

結果 1. 金津では1960年代を中心とする産業構造の変化が大きく、なお子供組行事が継続している要因は、村人の有形無形に保護する力が強く、慣行化している。同夜では漁業を中心として産業内容の変化はあるものゝ、子供組行事と生業及び呪術的信仰的意識との結びつきは現在も強く残っている。2. 子供の数の減少によって子供組は小規模化している。村人は遠まきに子供集団と距離を保ちつゝ、そこに自治的な力を養おうとする努力がみられる。「大将」となる資格は年長(13~14歳)である事のみである。年少の子供にとって年長者の命令や厳しい仕事はあるが、異年齢の関係は柔らかない。3. 子供組行事は子供にとって遊びや「楽しみ」の要素をも多く含んでいるが、村人にとっては、次代の「青年期への予備的段階」としての教育的意味が大きい。